

兄さんがくれた人生

最近あなたのことをよく思い出す。弟をいつも気にかけていてくれたあなたは、もういない。それが今も悔しい。

三十年前、町の生活に破綻をきたし、生後一年に満たない赤ん坊を含む三人の子どもを抱え、途方に暮れる私に手を差し伸べてくれたのは、あなた、そう兄貴だったよな。

「お前の家やろ。気兼ねいるかい。はよ、みんな揃って帰ってきたらええ。二人きりの兄弟やで、水臭いこと言わんと、さっさと帰ってこんかい。賑やかで楽しくなるやないか」

それから、実家に戻ってから生活の再建がままならず、焦る弟を案じて励ましてくれた。

「焦ったかて、どないもならへん時はあるもんや。一年や二年、回り道したかて気に病むな。わしら、たった二人きりの兄弟やろが。頼らんかい兄貴を。いつでもお前の味方や」

子ども時代と変わらぬあなたの対応に、どれだけ救われたか。それが負担になり、あなたは命を縮めたのではなからうかと悔やんでいる。

父とあなた、二人でやっていたブリキ屋。職人のあなたは、高さ四メートルの足場から落下し、そのまま亡くなった。

朝、出かけに顔を合わせると、少々疲れ気味なのが見て取れた。それでも元気を装い、人に心配させない気丈なあなただったのに。

「おはよう。仕事行ってくるわ」

と、いつもと同じ笑顔を見せてくれたが、数時間後その笑顔は事故で永遠に消えた。遺体と対面。通夜。葬儀。あつという間に時間は過ぎた。悲しみは徐々にやってきた。

一周忌を迎えた日、父の話に目を瞠った。

「お前の家を建てるぞ」

「え？」

「元気やった頃から、兄ちゃんな、ずっとわしに言うと思った。お前が落ち着ける場所を作ったらなあかん。長男やから、俺には最初から家があった。そやさかい、偉そうなことも言えたし、仕事かてちゃんと出来とる。弟にも同じ条件与えたら不公平や。俺は大きい顔して説教もできひん。なあ、あいつの家、建てたるんや。思いつめたように言うてたわ」

思いがけない話だった。弟をそこまで思いやってくれていたのだ。あの底抜けに明るかったあなたの笑顔に救われていた私なのに。

「あいつ、俺と同じ土俵に立っとったら、絶対負けやらん奴や。頭はわしよりええし、負けん気も俺以上や。家を持ったら、家族を守るために、ええ仕事やってのけるで」

世界でたった一人、認めてくれたあなたに、俺の生きざまどうだった？と問い続けている。